

葛飾区史編さんだより Vol.17

総務部 総務課 区史編さん担当係 03-5654-8444
郷土と天文の博物館 03-3838-1101

葛飾区



平成 27 年 2 月 28 日(土)午後 2 時から、東四つ木地区センターにて「昭和の葛飾を伺う会」が開催されました。

多くの方にご参加いただき、東四つ木にまつわる様々なお話を伺うことが出来ました。



新堀川

現在の東四つ木コミュニティ通りは新堀川という川でした。この北側は比較的早く開け、工場などがありましたが、南側は昭和 20 年代まで池や沼が多く、金魚の養殖場などもありました。雨の降る日には池があふれ、金魚が流れ出てしまった様子は多くの人々に記憶されています。また、小魚が多く、四つ手網などでたくさんの魚が捕れたことも印象強く記憶されていました。もともとは立石(梅田)から流れてくる農業用水で、排水路として使われていました。この地域は湿田や蓮田が多く見られました。こうした湿田の水を排水するための水路として設けられたようです。水のきれいな川でしたが、昭和 23 年頃から徐々に汚れが目立つようになりました。綾瀬川の出口の水門は、潮の満ち引きのときに水量を調節できるような仕組みになっていました。

ここから中土手にあった橋は、手すりもない簡単なものでした。一応通れないようにはしてありましたが、近道なので子供たちも渡っていました。荒川放水路の工事で土木作業員が使った仮設の橋がそのまま残されたものだったそうです。



東京大空襲の日

昭和 20 年 3 月 9 日の夜、東京下町は B29 爆撃機の空襲を受けました。死者 10 万人におよぶ人的被害を受け、東四つ木(木下川・渋江)から荒川を隔てた東京の下町一帯は灰燼に帰しました。東四つ木地区からも燃え盛る被災地が見え、人々は恐怖の一夜を過ごしました。

3 月 10 日になると、被災者が大挙して四ツ木橋を渡り、葛飾区に入ってきました。空襲で家を焼かれた人たちがまさに体一つで逃げて来たのです。こうした人たちの一部は、行くあてもなく、まだ農地や空き地が多かった葛飾区に仮設の住居を立てて住みついてしまう人もいたようです。

「中土手」と呼ばれる綾瀬川と荒川の間の中土手は広がっていて子供の遊び場になっていましたが、ここにも戦後一時期、多くのバラック住宅が立ち並ぶようになりました。いわば、戦争被害に遭った人々を受け入れる役割を担ったのです。

昔から東四つ木(木下川・渋江)に住んでいた人は「町を歩いていても知らない人に出会うことが多くなった」という印象を持つようになります。やがて世の中が落ち着くと、都心から移住してくる人も多くなり、東四つ木の町は急激に変化していきました。

木下川薬師の花祭り



東四つ木地区は浄光寺（木下川薬師）、渋江白髭神社（客人大権現）など江戸の庶民や武士たちの信仰を集めた寺社が多くあることも特色のひとつです。現在も4月8日になると多くの人たちが集まります。

かつて木下川の人々には、花祭りの日に草団子を作って食べる習慣がありました。遠くに住む親戚たちが木下川薬師にお参りに来るとこの草餅でもてなしたりお土産にしたりしたそうです。

三歩歩けば池に当たる

戦前、木下川付近は池が多く、「三歩歩けば池にあたる」と言ったそうです。これらの池は子供たちの水遊びの場として使われました。夏休みには水泳の場にもなりました。ところが、こうした池は水の事故が起こりがちでした。夏休みが明けると校長先生が「今年の夏休みは〇人死にました」というあいさつをするのが常でした。

そんなわけで、木下川の子供たちにとって水泳の練習は何よりも重要な課題でした。上級生が下級生を池の中で鍛える姿がよく見られたものでした。

また、中川や荒川にも水泳の練習場がありました。中川の奥戸橋付近には永田流という水泳の練習場があり、木下川の子供たちもそこへ通っていました。学校にプールなどなかった頃の話です。

ふいご祭り

東四つ木地区の渋江にはとくに鉄鋼業の工場が多く、釘やボルトナット、刃物などを製造していました。こうした鉄鋼業の工場では旧暦の11月8日に「ふいご祭り」をしました。「ふいご」とは鉄を赤める（赤熱する）ときに使う送風のための道具です。現在は送風機を使用していますが、昔の道具にちなんで「ふいご祭り」という言葉が残っています。

この日は仕事場に作ってある神棚に「水」という字をかたどったミニチュアの鉄の作り物を作ってあげ、しめ縄を取り替えます。鉄鋼業の工場に作ったしめ縄は通称「大畑」と呼ばれるもので、真ん中が太く作られています。このしめ縄は荒川放水路の中にあつた大畑という集落で専門に作られていました。鉄鋼業の製造方法や技術は大きく変わりましたが、現在も「ふいご祭り」をする工場は残っています。

私設水道

当初、金町浄水場から給水される水は葛飾区域の住宅に届くことはなく、人々は昔ながらの井戸水を使っていました。東四つ木のように急激に新しい転入者が増えた地域は井戸を持たなかったため、飲み水に困りました。そこで金町にもあつた私設水道が活躍することになります。

『本田町誌』（昭和4年）によると、こうした私設水道は渋江と木下川に4つありました。渋江では延べ700戸に給水をしていました。当時の渋江の戸数は1200足らずですので半分以上の家に給水されていたことになります。また木下川の私設水道は当時あつた青果市場が経営していました。

このうちのひとつ、白田水道の関係者の方にかつてお話を伺ったことがあります。それによるとこの水道の水源は地下水で、一度タンクに汲み上げてから各家庭に分配しました。水道には2種類ありました。ひとつは、「表水道」といって家の外にある蛇口を数軒が共同で使っていました。これに対して家の中で使える水道を「ヒキコミ」といっていました。昭和の初め頃、「表水道」はひと月30銭、「ヒキコミ」はひと月1円の使用料がかかりました。